湖月鈔

[illegible]

823
M8Ks

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

7152

末摘花

并　源氏十七歳付春より明る年の春まで在
若紫の并なり。撰塁とてみな若紫と源十七歳の二月より
同年乃冬までの事あり。此巻ハ若紫の以前源十七の二月より
次の年の春までの事あり。是を撰塁とも云。并之欤　并
詞を以て為巻名。詞云なつかしき色ともなしに何にこの末摘花をそでにふれけん
哥ニ云
此巻ハ常陸宮の姫君末摘花の御事をかける故乃名之
紅の花ハ末よりさけばやがてつむによりて末摘花
花といふ。姫君鼻あかきによそへて云へる也

思へども　細流発端面白し
玉鬘の発端しおなじやうなり
然れども玉鬘の巻ハ彼
玉鬘乃ことを書おこしたるにて
そくなからず。末摘にハ夕
顔の上乃ことハ只御書き
此巻ハ夕顔の上を云がら
あまりふかきに源切に寄
中の詞と見ゆべしとぞ云哥の
又みるに玉ハ然なく
し深切に思ひのあまりし
古今　思へども猶うとまれぬ藤ね
ハの哥も思へどもとなき
ねきおもひのあるべし。此末摘
なとも夕顔にも夕顔
に別てのちもなりたる人
まりやかたけるなり
咲此詞花乃[illegible]
[illegible]花夕顔の事[illegible]
若紫の詞と[illegible]
紫巻二月より山へ[illegible]
[illegible]
[illegible]若紫より
[illegible]

思へどもなほあかざりし夕がほの露におくれし心ちを、年月ふれどおぼしわすれず、こゝもかしこもうちとけぬかぎりのけしきばみ心ふかきかたの御いどましさに、けぢかくうちとけたりしあはれにゝるものなうこひしくおもほえ給ふ。いかでことごとしきおぼえハなく、いとらうたげならん人のつゝましきことなからん見つけてしがなと、こりずまにおぼしわたれば、すこしゆへづきてきこゆるわたりは、御耳とゞめ給はぬくまなきに、さてもやとおぼしよるばかりのけはひあるあたりにこそは、ひとくだりをもほのめかし給ふめるに

夕良巻まづあて書かろく 露まどくれし 花鳥余情時分に ...
院らに訪ひて出忌てく ...
御いどこの ... 桃 ... 細
くらし花司馬相如琴のしを ... 卓文君と桃 ...
... 孟 ... 師 ... 細
... 孟 ...
... 師 彼御母 ...
... 箋 ...
... き人のそ ...
まそしそろ ...
箋 ...

なびきさゆかしもとめくさるれしくら
あるまじくぞいとめあれうつゝ
なびきぬもありてく
ひつまくさらうし人なすく情とらう
とらてく
うきたすじおまりめの頃どもて
まそ恋ともくしもて夜ぶ治

のあひさしけゐ
篋ぶれハ源の ...
とうまうとらてゆ ...
まゝせうる ... 男 ...
...
げるの空蝉 細 空蝉田舎
へ下向の ...
...
かうけのゆられ ...
細 ... の萩の基 ...
ゑかし ... 萩の ...
... 細 源の乳母
大弐の乳母 ...
... 王の ... 大輔
何 王 ... 命婦 ... 論 ... 源氏 ...
世雄無等論 ... 智 ... 等論
... 弘安の源氏

まてしたかくしこうちさこゝまりかたし
あるらともあれハのあひさしつるをゆかりけ
まかの空蝉とあのゆかりくゆれ似ぬ
しい川荻の架ぬべき風のうてう
あらむ八ゆかろいゝあかりわ
けのゆられたるしさ酒ハまさこそやうゆくも
こゝは母そゆかりて大ふさ名
れとぞえて結びつりきこさか我のめ
て大弐のあるのれさしつとこを母いて
め大輔の命婦とそしらるさふ娘わうむ
どうりの兵ア大輔なりうハむもを
まいひといゝうきこのめうわうへみくあり

猶淺からす新行説とて今の義を就義と定められ第一説我惡臣通。又云和漢通用之
通和漢ニ歟云云。此義無其謂。不可用之。孟王孫まて性を不賜平人なり。いとしより
のうちほえもむつしハ秘事とまうしならはす
そくいちくせんのかミをめのとて
師らくせのかミとしもやし
孟大輔の命婦の母也
輔まて謂別して今ハ絶家なる
かやうく
とはたくなりに らしとかまて
かなふ 孟末摘の父宮
と御 此説されといかゝまて
常陸宮といひてそへとく。
細流ニも此説まれり。
冥おもひえさ 又一説ニ又
元ハ兵部大輔ニ母ハ親蕭へ
引して藤又のりとを思ひとすせ
一ひまうち。今おもとら備令
婦の説を入書によりて作ハそ
源氏傳へわたしひとつらのあまりま
八常陸太守に任しられまし
摘花の父ニあらす。紀 光孝天
皇御宇仁和八年正月任常陸
大守。貞保貞純親王代明
親王等任也
承和 續日本紀第五平和
五年正月庚申朔壬申四
品忠良親王為常陸太守
從五位下藤原朝臣貞公
為介

嵯峨天皇
仁明天皇 諱正良
忠良親王 二品式部卿 号賀良義 貞觀十八二三 十一薨五十八

ものからへ 細 大輔命婦
のうちのひられたる方とへ
らうくしきいかゝ筆
まの春のも有。書きわたく
ふとうつく數く
わことはえらゆるもて
暁えらんとられたる方と云
えうしとつひ(?)らく
ひひそめ 河 潜 以赤の春
のひてひまへり
へ眉をひそ(?)ひ
三つのとも 細 樂天北窓三
友。琴・詩・酒也 河 今日北窓
下。自問何所為。欣然得三

けるを。君もめしつかひなどし給ふ。はゝは 源氏 兵部の大輔
ちくぜんのかみのめにてくだりにけれ 末摘の父
ばちゝ君のもとをさとにてゆきかよふ。こ ゆきき
ひたちのみこのすゑにまうけていみじうかなしう 常陸のみこすゑ
つきしかしづき給ひし御むすめ。心ぼそくてのこり 末摘也 父宮 まうけ
みゐたるを。ものゝついでにかたりきこえければ 命婦源へ申也
それはいとあはれのことやとて。御心と 源詞也
まりてとひきゝ給ふ。心ざまかたちなど 命婦詞也 細 ふかくしらぬ也
ふかきかたはえしり侍らず。かいひそめ人うと 細 うとうもてなし
うもてなし給へばさべきよひなど。ものごし 本 うとうとし

にてぞかたらひ侍る。きんをぞなつかしき 末摘ハ琴 文給への衣
かたらひ人とおもへるときこゆれば。三つのとも 源の詞也
にて今ひとくさやうたてあらんとて。我に 源ハ女子似合しうちれやわらんとて
きかせよ。ちゝみこのさやうのかたにいとよし 孟常陸宮ハ琴の上手
づきてものし給うければ。おしなべてのてにはあら 末摘も父宮ほとハあるまし
じとなん思ふとの給へば。さやうにきこしめす 細 命婦の詞也
ばかりにはあらずやはべらんといへど。御心 源の御心をとむるやうにいひなす
とまるばかりきこえなすを。いたうけしき 細 源詞也
ばましや。このころのおぼろ月夜に 朧月
しのびてものせん。まかでよとの給へば。わづ 命婦なり
らはしとおもへど。うちわたりものどやかなる 禁中の事繁も少なき時なり
はるのつれ〳〵にまかでぬ。ちゝの大輔
のきみはほかにぞすみける。こゝにはときどき 末摘の方ニハ通ひて大輔の家別なり

友三友者為誰　琴罷輒挙酒　酒罷輒吟詩　三友遞相引　循環無已時　一弾愜中心　一詠暢四支　猶恐中有間　以酔弥縫之　白氏文集

細 河海 待ノ事　令嬢を其時分に内裏を退出して末摘へまいれと也

つれ〳〵けり。命婦はまゝはゝのあたりはすみもつか
ず。ひめ君の御あたりをむつびて、こゝ
にはくるなりけり。のたまひしもしるく、いざ
よひの月をかしきほどにおはしたり。いとかた
はらいたきわざかな。ものゝねすむべき夜
のさまにも侍らざめるにときこゆれど、なほ
あなたにわたりて、たゞひとこゑももよほ
しきこえよ。むなしくてかへらんがねたかる
べきをとのたまへば、うちとけたるすみか
へすゑたてまつりて、うしろめたうかたじけなし

とおもへど、しんでんにまゐりたれば、まだかうし
もさながら、梅のかをかしきを見いだしても
のし給ふ。よきをりかなとおもひて、御ことのね
いかにまさり侍らんとおもひ給へらるゝよの
けしきにさそはれ侍りてなん。心あわたゞ
しきいでいりに、えうけたまはらぬこそく
ちをしけれといへば、きゝしる人こそあ
なれ。もゝしきにゆきかふ人のきくばかりや
はとて、めしよするもあいなう、いかゞき
ゝ給はんとむねつぶる。ほのかにかきならし
給ふ、をかしうきこゆ。なにばかりふかき手ならねど、ものゝ
ねがらのすぢことなるものなれば、きゝにくゝも

ゆかされたど、いとゞいとうあはれまさりて、さひ
しき雨にさぞ住かりの人乃ちうめしう。
[illegible]
こゝろきくりしつゝるもんへうりきん名所を
くいうに住まりしのらをてうるなかしんかや
の雨まこそえ、菊地殿かとおくられたすること
ぞきとはりきれたなど、さひつゞきくのやい
ひかし海へと出がきど、しらつけめや出かりさ
人とぢうるも何かしくて、やとうひさまり余
娘どどあるまの中く、いとうそてたしう世話
らじとさひされど、くまりからよ待めりまう
うまのうんと待りつゝ、いとひかかもこそ、
今かのよるよ、とざりうし来りをすんとして、

[illegible]

細 源の方へ
令娘 源の方へ来りんとさそてえあうく
盃 令娘用役なか
細 源の別之

いろかくまそのうらそくうされ八おくかく
たゝり積めらくもやとめうれけの中見く積
めとあしくそねさうくとのまふ字は名之物らし之

孫のあ(?)くへ師よ人のたまひをる
とをへかゝしあかりしたりとよ
みへの孫の教訓を承(?)に入さら
うと令嬢のおふてゝく
こゝろ(?)りうててき之ハ
細 令嬢らいつくひくの師母く
うくせんと見りくるし
若よ(?)とをりらけ　孟 花鳥
ニゝ令嬢か芸後のすかとおほく
のもやうに孫のこらもあらくのかく
らゆたゆらく 細 こよのよくて
人をもをのやうにいおりかまうしや
こと令嬢のよたきこことりり過
微よられも今と　師云 又多く
しう心しも微よりのさら
あともあれふやうにもうらハ
令孫ハまゝらせにれ
いなせか言の雨紙うれいを
しうらわさハ男子孫をく
そよ時かうひて(?)への師兆て
これ(?) 細 故業殷文なるの
所す細え 師云 故業人のちょうか
はゆのやうに(?)しく殿よ物

しめさ(?)くしく家播の行きれ
そうらうり
人のまあまゆうしきれと
細 孫の宏(?)法よまうまれ中
を内裏よ作あつさトや
しおなり
じ人のいうんやうまと
みすあひもきれて
令嬢のならをすくら分として
人のこゝハあをあるくハせを
るゝのまゝを好色とのて
ハ令嬢の身行なとハらうし北
るつあらんとくし 北 令嬢ハ
ほめのとれよまれハらくの器述
立人のうこに 妻播のそうき
とゆうしとゑて名をたりひ
のうらしやせんとて震殺勢
へ直おのうく
まいらい
孟 ス行年 遠垣なり

見しらり。 細 孫の初く 師せしらへらぢらうきゝ
ひまちこてせうと殖(?)しの孫へとし
くてしるへいづくや いてゝりけもうらわ
細 令嬢が初く　く薄果てゝ乙ひ
ま折りひきえて こゝろうりーし
主吏ハなしよろかさをとし
一遍よめる(?)紙らしろめされさ侍め
孟
むげのをとあるし、微よ義をとへ(?)もうら
とけてうくふ御きへのらうけくこし
あれるし、義つり出門さつて人の仕方これ
細 中ヲト世とく
いおささやうのまうしこ紙聞のめりをそうとうら
細 孫の文を教を寒う師方むかうゆ吉海く
ひまふかうこ教まつるうしやあうんいとこのひ
細 令嬢の孫へく
てりへ見こ画ふぶへのまゆへり出はしま
もとしりて 中 とことううてしきせのかへ たら

しらうふ見へてしう(?)しおりくへ侍れかへるの
細 孫の主ゆりの教く
ほやつま退きを。いりくくハ雨とんじ流きん
ともえら面れハるらくうらしまく ひろく
細 をうとうてもとされまし
ことへのもんやうよしつれあうれそ
られさへめるゝまきあるさせひとゆうか安乃
有様らうしんとのつかうへいおわりいと
めつらうと好(?)のしくおしくゝうの孫よを
そ例しとえひて、嫌ともうえんでへ悦さ
孟 妻播の孫々ふく
よ人のせゑひさうくやうゆやし見して、や
よろしめらいふくあふ嘉いぶいのゝうでもう
甚よう流布の人流し 作ささあらく
ゆれのうりゆゐうくれのことよまするすまち
孟 歌中秋の言ゑーなると
よりしるもそう男こそせう。猟者 孫らく かん

ん。心かけたるすきものありけりとおぼして、かげにつきてたちかくれ給へば、頭中将なりけり。此夕つかた内裏よりもろともにまかで給ひける、やがて大殿にもよらず、二条院にもあらで、ひき別れ給ひけるを、いづちならんと、たゞならで、我もゆくかたあれど、あとにつきてうかゞひけり。あやしき馬に、かりぎぬすがたのないがしろにてきければ、え知り給はぬに、さすがにかうことかたに入給ひぬれば、心もえずおもひけるほどに、ものゝ音にきゝつきてたてるに、かへりや出給ふと、したまつなりけり。君は、たれともえ見わき給はで、我としられじと、ぬきあしにあゆみ給ふに、ふとよりて、ふりすてさせ給へるつらさに、御をくりつかうまつりつるは。

もろともに大内山は出つれどいるかた見せぬいざよひの月

とうらむるもねたけれど、此君と見給ふ、すこしをかしうなりぬ。人の思ひよらぬ事よとにくむにくむ、

源 さとわかぬかげをば見れどゆく月のいるさの山をたれかたづぬる

かうしたひありかば、いかにせさせ給はんときこえ給ふ。まことは、かやうの御ありきには、

花 狩衣姿 [illegible]

孟 源の末摘へ [illegible]

孟 天蹤地蹤のこと [illegible]

細 大内山 [illegible]

花 帝王系圖 [illegible] 宇多院山陵在大内山 [illegible] 仁和寺 [illegible]

やすらふ月こそ遠からし。但上みをいふこしんひの月也し此説ゆくおらず十六日の月をいふにてこそやれ
おつるかし　師　十六日去りてみくしとゝろく
こゝわらぬ　細　面白きく月をいふ　雅とめかれとも入方まてしも秋の人にもなる
花星うらぬ月の前りとなしられとも路うこのゝこの山中にてしも人もなるを
ねるゝくおくむらひとうくゝし又いるさの山ハ但るの名也之
ところにたて　細　かくかゝの法おゝこゝに　師　以中称のやうにて立こくなるしこのみ
給足しこゝそ
絵定國利君の思ひいての事の時にかゝりてまつらぬおゆゝく洒落に合てゝのことし大和物語泉乃大
かりうらまうくりのしまつり事こく祭ありていつて給しきる使まるおゝくんる
あけさいかんりたまふの悪や涙作にありみたらしけりし花とりけり
とそ「然のまくこれらの枝乃の君乃上を秋ますはちくゝこ
にれ作うくいゝと衣を物しし給りて其秋てゝ物にわくくるゝ
ものらくゝ給ひゝるたまゝくまくのをくも
をゝさくさせ給ふくこまおゝあ
孟　此経給りくしくハ　師　以中待従君なるかたにて
のもとも遂へのうしんまゝく
らせたまふく
くゝのことゝろ事ゝらしと
細　源のさくらりにと付とう
ありやうあれと其ぬの上れ
ろとゝハ物打つけかも秘く海
ころね　事のうしさるし　師
のこゝろ　院ともへのそのの事

かくあさきこともあるへきれとも
給ふこそあくめやつれ給へるを
うちくまさこともおそろしきとてゝ
さるをしそまうけるのとみつけらきを
しと此間世とらのたそしこゝえゝね

とらへ中るらん此絵
中と源內侍かものゝおり
とりるこゝろま　孟　初ハ此
けうへ人の心ひつらきて
蒸よあり　師　以中の源の君
あるさとそけてこつれわされ
らと源もしらこつまゆうすと扮
かひとく其恭の初めらかれ
となり
とゝうくらきれし　源も以中
とおまりうふ方なれとまには
れおひて行ゆうて事も男
いさ車にのりてゆゝらしく
人々の廊に　細　物衣なめると
とまて衣は政めに猶くおゝよ物衣
かの衣へにのれてもとおりしもの
うりありて書衣を物衣を
政めておきてみなて書衣を
みるとまゝるかゝるへし

さくのはとりきこゝろなむけにくゝのつらつり
けわしいけともくしさうれろうやうあも　いはち
てえゆきとわれ給ひてひとつ車にのり
く月のゆゝしきまゝよ雲かくれしろ道の
程わたくしおゝさそて大殿によらてくるしか
さにも此徒と給へしは思ひてゆうくてつうく
大殿へまうりきて
ぬらくはれいるまへしめてうら八給つれな
孟內裏より又女かの給ふまゝきて
うゐまゝうちゐくは猶よとくとうこ
ひとくゆうけ里には待いのうて書くし
細　蒙上の又女房く
給へそ御猶とりおまの人つまいとよりつり
狗猶ゝ
おもふされとゝうくゆりしろくつおたさおに
孟內義蒙上の女房とも比
無ゝてくらうとへのつまにてうえ

歌の表　細　次中務のくゝつけはとへりてうられて深うりなどとかうらくて海うろわろとは深のすくとききあしげあくくりうてまり　師　琵琶ひくとけどはふまうゆへひつるてそくくつらうとくみくしうえてこゝならね歌よろけれこれまんも　細　中務思のくゝこゝ深と一向うりくえさて曲つる歌のよあうらんいそすうかうくさのわらぬとくし　師　蓋上の孔方どをのえもおのえ思うらへありつつ機どの書　孟　末摘の孔竜ぞそうら為みとくへうてうらとしらむなろう

あるもりもとれ　師　次中ひ末摘ふようらて扇くそ

中のうらむるゞら思へる

琵琶ひく

へでまかせあふ中務のこゝろわびしび

かくひけど歌のまへろうけうるゝをも

てられまらくゝこの海されろ為をき

しらこのおわりされとい、ひそこぶしく

ぬよとのつくられおくておとろとも

おうらん地ありされハ拙掛まとく

しくけしあてさらしとそを海じし

みくらうらう合して、すまらぬ一布つれ

けそされるんもさとるま仏陽そくゆすひ

ろされつい。たらハありつる機どの為を

甚しあらく哀げぬつうとはるの海わしと

もやうくゝ妙りしつもひつゞあも。ゝ曲の

くらまいとゆりしうらうこれ人へのゐそ鬼

月とうとねわかさんとこゝこそめぐくいとと

しうとわらぬつしくへ人ふをりてまは

ゞなくらのや。わりのとしき海わしとさん

るどきくへ中ねしもひかりこの為のくう年

多くをわりと指どすゝしさてしいらくし

あひてんやしなあ、のるうかやかうりよわ。

その妖らここまこうれさすうつこそすとやら

まかべしいつまでもくゆまとうくてゆず

つらすくらやまれしるめ。あうりくうてとと

あうられさやうたうらをすひとそうへい。りの

おひそりきうもちしれ。つるさ木ふお雲

ゆかりしらく
甚多かりけるらくし
きこえてわたり理まて近
車にことゞねやうなりかお
しきことかなとのり花を
あ橘とんかきさ上﨟となよ
くさかいなう門く
ふかつれしきり
川のうくしことならく
かつゆきかなけかハれるき
みるゆく まゆかゆゆくし
きれへよいひしりきまきうら
細 源のふかけりきそハ華
ねもみどきりありし
そ
つきえんしもゆきやしゆや
細 紙ハらんしも云ぬあまよ
えきらりしくハやかし源の
ゆかくろの給ハく作まよ
とえうしとも又みそうま
きいハえなのゆかハぬし
面白き細し
細 今まさしきかうし
源の

のさまことつけくきこゑうるおしなりにして。
ふしをとゝしらしらしくありくあらんに
そ。哀なるべくかれ。ばかりにしても。けしからう
あさりむすれをるらんはふつきのいたうさ
かひさりし中将はまつくふいつれしなり。
例のへいそらうしものかねくみろくきつく
のこをかへきまつやくくゝまりまとあらうり
しこそうしされくてやこゝめしとこう
まうれはされつよいひしりわきうそやとこ
惜く思はれくいさえんとしもやむかひ
あやみうそしけるのしとつくあさき人に
しまうし様ついちあてさらはりく

の給ハ源へハ花うる のあうら
とねくくにすかし花中将
のらく源氏のゆきええへと
も給ゆハゆるて云ふかへ
さをもすみかう給て京が
えて宮ふとらふそおぶてい
へきりけりとわれくてに
あつうし晴 源のあへしら
ひやうねもなきすかうや
すれつし
細 云ハ花中将ハ合はよ云へ
きさやうのうこふそふかく
べきことに源のうらにのハらく
ゆすでいぶかねども花中将は
今ハなしのふ様くに
源本ニかしゆるの花を
しちりとわりにける
るハ錬なに錬磨となる
どらしくしくらとかねく
とゑゝく
三ありらかりきそきりのうら
師云 源ハ花中将りにて云
まりゆへるのかり給ことなん

なしはらくねこしのさうちをしけるうさくと為
そく思ひたゝり給あいとうろのの中将
のひあひきもりさゝしまひよくのひきれ
いろんそることそるゐひへしゐきうかな
かくるとのしやうえひるすらうう人々を
しにしそいあまいれうへもたれて咄傳て。
含強をもあやうようらひ給。地位つるふ
くめてそうあれこう有様も一たんいとしふう
きさて給くしきこえてあうさかしひかせのよ
よつしそあいしめさりのとうをうじうきこ為
つまねまうねとくく ぬ袖と。人のふいのかやゝくたりこ
とそりくて。思ひきそよ乃くこけさまなへとの

あはれ比由うやうにいふらんよ赤猫をうたひそてしらるかはは源を中りハさうあらうたて
くこゑん、いひしれんしらうんと笑して合殿とりうらひあかく
人のんれのびやうなうるけるくて 女のうき
らふすこそしまつのあかうとある
あからさしとやうくあらうびなうう みなしいふあらハつあてなどのつらう源もまさら当次
おやすらうみもなうらすあかとうくこれ源の人さもきうしくハあらて実よ赤猫を雅かを上
よ赤猫のあり殿・叙くくうくのとやうくうらしむかあらもなくむやまくて源のは人にらるへうき
のこしくらりこ 孟叔名るよハ女の人乃ゆあはるるうて男のあやまちにとうるすのあらとへ是ハ大
くこれしくらくとのすふとあり縦れ叶さへるし
いてやまやとにあしに託くこれき
風どうり みは
源のぬくまあふ風流たらくさあ
さしり而よハおつかずよしに絶
でこしあわうこのぬくまは
わひるるひのあれへとうや入
孟いそがいの催樂の翅所
源よあり何いとしがかさせ
なか何ゆまぎとんてやわ
がゆうかひたきこの氣もや
しりうさやとうりやとうりて
まうしふしまでたもとき
おもひわされそのあよ
孟是ハ名紫のすへ乃るすへ
撰の益
みくくやさくに 細 名紫乃
ましのめ、あのび附そし 孟是
うらみ 撰の益へ
のさぬきの志をも
花みをしめよとうりて夕良の
露のをとけのたり 細夕良
以上の一周忌よ成るん
らくもて 世人よ俳よつ
出るきんたり

川くくわびあやまらよなりぬへきあいきはし
のどうふくやつしうれけうくあいりかひ
うらむうらもなううこくろやをとうらんへ
叔兄中外分猪とりうきうぐ
やくなへハうらうるうらんへさとあのあへいか
やうなうにゆすしれるこのんれうらやどうよハ
えとしのやとうますゆふるこくもれこと
へは物づくこしかときりけらうかこりしきにけり
ごうらうけのしあかくへれなんとこうらあり
世よあらうくさすそてくへ
きはこううくさし白らうくしるう
細 源物へど
まさうこうこくろハなさきれめりけとこめりし
うゆわけうるらんへしそらうらくいあうへ弟
追しもぬもれとくとふれるとのあふいかさの
えびいくひさまさひハさんれぬりのもひのまさぶ
春蓮の
追もれ心のいら海なきこやうふめくる高度意
ぬ林の比頂ひさ川うりゆがしつけそう
のさぬきの慕をもうくよつきてゆふめくらり
しさへつしひさつ 比頂 おもしらまうくにあら
赤猫
たのうさきめけさしとくゆへしあへどおす銭
出がつくをあらう乃とあれぐよつうきてかや
源らくへ

いかなるやうそ
源氏の御心へかやうなりつる事
まだいかなるゆへそとなり

もてはなれて
細 宮なとにつきたる人なとは
さ[illegible]ねとあそひ[illegible]
つゝましくゆかしくなるへき
師 末摘の御事を命婦か察
してかくなり
細 此上のことハ聴ろと
てさまる所なり 章乃
御心 新注
ひとりみをもえ心にまかせぬ
おもひしらん
師 末摘もつゝましくおもひし
つゝてかたらんとも[illegible]そ
かくやせ源をも命婦つゝしく
よかくしきせハ末摘も同

まじう。まぜていやまじれはこゝろさへそ
ひて。命婦をせめ給ふ。いかなるやうぞ。い
とかゝることこそまだしらねと。いと
心やましと思ひてのたまへば。いとおしと思
ひて。もてはなれて。にげなき御事とも
おもむけ侍らず。たゞおほかたの御もの
つゝみのわりなきに。手をえさしいで給は
ぬとなん見給ふると聞ゆれば。それこそ
よづかぬ事なれ。物おもひしるまじき程
ひとりみをえ心にまかせぬほどこそ。さ
るかたにても。ことはりなれ。なにごとも
思ひしづまり給へらんとおもふこそ。

源のつゐにかくることなきといふ心
細 命婦か心
細 命婦の詞
細 色をかさねたる海なと
孟 これハ不似合と源の詞
年いはけなき人のこゝろ
細 兄弟なとの中をも[illegible]

あやなしとなり
師 世におはる姫君のやうにふみ
とりつかひ中立もありてこそ
思ひしりて返事もかきけめ
よはあるまでくりそめ申す
みこそまたかくきこえらるゝ
なれゆかしくおもふとも
末摘ハ源の恋をかふむると
ゆめしらるまじとも こなた
つきて源に物いはせよと命
婦にのたまふ
みゝとゞめ給ふくせ
花 一致する心をみてと云
あひなくせんかたなしすく
さうしきさよひゐなどの
ころわきたるかたにこそ
孟 霄居也 師 宮にものの
給ひてよひゐのつれづれ

そこはかとなくつれ〴〵に心ぼそうのみおぼ
ゆるを。おなじ心にいらへ給はんは。ねがひかな
ふ心ちなんすべき。なにやかやとよづけるす
ぢならで。そのあれたるすのこにたゝずまゝほし
きなり。いとうたて心えぬ心ちするを。かの御ゆ
るしなくとも。たばかれかし。心いられし。
うたてあるもてなしにはよもあらじなど
かたらひ給ふ。猶世にある人のありさまを
おほかたなるやうにて聞あつめ。みゝとゞめ給ふ
くせのつき給へるを。さうざうしきよひゐなど
はかなきついでに。さる人こそとばかりきこえ
いでたりしに。かくわざとがましうのたまひ

源と同心して[illegible]
末摘の
源の無理なる事ハせじとの給ふ也
末摘の心を源にあはせ[illegible]
大将のやうにすきかましく
源の心なく
細 命婦か心

やれそといへる首尾之
なる人へそそ　末摘乃
さまとなりしるく

あくたれこちひきさり
孟　左門をそて源の往来
附バとのうろく令嬢を
ゆかしがよ末をともしぬ
るゆよみへらちせバくり
て末摘のとかいとどれ
ぬましとえどく

くせらめづらしき法事
えんの
源のゆかしくのひの出あふを
末摘の方の女房あまりうれ
しかるよおもそし末摘よ[illegible]

とだえがちなりしかバさらによくわざと
ぶ御しうのまひしられバおのまもなうて
く。姫君のけはひさか(ゆ)かしく。
おしめさたどもおもしぬを。申くだりて。
ちかづきよいておしきこしやらしたりんとれ
りひとれど。きみのくせあやなのめなの
ま。ひつれざりんをひがくしきもしち
みこの地をしもる折かぜは。うかこぶらあ
さらしてとこすひ女ゆうの人もなかりお
御とまして今ハわさらさく治ひとを
くし。よろへ世よめづらし飢けれバ
のりらひらくとバたな御女が

さふらふまえもいれあるね
孟　文をとれへ一向よ見まれ
とありり
さそおぼ源らねし
孟　さそでもわらバわれとも
師　源の御心よ従ふそは
まてみてやとあるんまそ
うくのんく
参令嬢ハ女是皆以一言ナ
くらくさり

ゆかりし月の
河六佰　恋うる心のとうみれバ
うきし山のとらにかゝるかて
月のあらはれバいらよ

ゑもけれバおとはゆめのしりまへともそこびのりし
まれどおさましらねつてうしおふなすく
ゐさふうよえもといれて御たらね衣りをも令
嬢ハさらバさりぬべかりしへ地りよ梅らし
よまそて給ひんほどはふよつてぞへらてを
やらゆりしおさまるべきふるくりかを地せ
しりよおもんとどめおりべきと人なりしあむ
あざめさしうりハやりがさうらおひてらく
ぞらふかもしうりとぞいそぶりきり。
八月廿よ日よひるうかてゆふらて月なん
りとなるさよほのかなるうさやけく松の
末も風のそよぐゝらほそく

すこしいまめきたるけをつけばや　細　命婦の心也　孟　当世の風によろしきやうなるさまをといふなり

ひとめしなき所　とかく人目をはゞかる事もなき也

なかなかしハ助字也

いましもおどろきがほによ　細　命婦ことさら今はじめてきくやうによそほふ也　孟　源の

いにしへのことかたり出てうちなきなどし（命婦は末摘のくらゐおもひて）

給ふ。いとよき折かなと思ひて（命婦の心也）（源氏のかたへ命婦消息）御せうそこ

やきこえつらん（ややおもふ也）。例（れい）のいとしのびておはしたり（源氏のおりしさま）

月やう／＼出て、あれたるまがきのほど

うとましくうちながめ給ふに、きん（琴）そゝの（末摘命婦に催されて）

かされて、ほのかにかきならし給ふほど

けしうはあらず。すこしけぢかういまめき

たるけをつけばやとぞ、みだれたる心（こゝろ）には

心もとなく思ひゐたる。人めしなき所（ところ）（孟　源の心おもひて）

なれば、心やすく入給ふ。命婦をよばせ給ふ。いま（細　命婦の詞）

しもおどろきがほに、いとかたはらいたきわ

ざかな。しかしかこそおはしましたなれ。つねに

かう恨（うら）みきこえ給ふを、心にかなはぬよし

をのみいなびきこえ侍れば、みづからことわり（源の恵みなき人をと）

もきこえしらせんと、のたまひわたるなり。

いかゞきこえかへさん。なみ／＼のたは（こと）

安（やす）き御ふるまひならねば、心くるしきを、物ご

しにて、きこえ給はんこと、きこしめせといへば、

いとはづかしと思ひて、人に物きこえんやう（末摘の心）

もしらぬをとて、おくざまへゐざり入給ふ（細　姫君の詞）

さまいとうひうひしげなり。うちわらひて（命婦）

いとわか／＼しうおはしますこそ、心くるしけれ。

かぎりなき人も、おやなどおはしてあつかひう（貴人のさま）

かうくしうらみきこえ
命婦がいひなさぬにより
と源の恨みをしらずとなく
てみづからことわりもとのたまふ
末摘の御返事もなきは命婦がいひもう
さぬにやと源へはおぼすなるべし　細
こともあるとき　細　なみなみのたはやすき
孟　文字ハ変字也　定家
卿　よのつねのなみなみ
きハかくなくいね源氏を
まへなるにはあらずといふ心也
るかなしきことゝ　命婦
やく
のゝしめて　細　命婦
まで源よ対面あれと也
なり

うんうんわてき流之様は
あつう人さ今はおひまれ給
ハへつきうへされらのれと
やあつ申あら御し
まことう人のつまるのそつよ
うきいあひぬ
河はなとこいそめ忍礼
孟不辞退（ふじたい）さらうにん
の申とうハまのつうく
いく人へきこして
細忍答などいわうてきで
とけとらうバまやうそて
ハあり　おんとく
ふのこれどハぢんなら給
わん
細令嬢の御し
御さりして孫を貴ふなど
まきき给んろハぬ白と
どしらてあれくし北れよ
ひろ申まひろとら　孟源のをし
つけあらハあつま　ささ命
ぬさせハ来の同かし
みさまのきハなう津子
細かあるなど安あさあ

ろこ宝のしまよ猿しそわつびのもとこともうり
なれかぞうらんば流そこされ首（おうさ）福（とおう）まおすんを
つきをに海かりいうハ流さこれのふうしそと
どして寒む末摘の称どらさてさすうまん人のつみことはつうう
をいおびぬれんめそいうしへいうして。こう
まけとわしばくらしなどさうしてえあり
おすんとのまうみのこれどハぢんなかう給ふ
んぞしいらそわんくあされかるやひみど
かよまみどいらくよくひいすてかさ半のき
令嬢の御きう人をまる御くいおすう涼子こつういとつくまうて流
源の御座を子まつるさ末摘の冬こさもめうらとさ刻きつてろよいとつまし
げは申がうれどうやうの人はおのいつ

御くしら
師末摘のき海へ　孟主人西身へ
孟源の御姿を掬を見ら
まうらん人ましそ
うう人よをせてさとく
孫のえん人わう出北ろうを
末摘をあひらてきぞ令嬢
へあゆしをんへは光へ

んかぞんへおしとこ寒ゆわしとそう給ぶら
きれど令嬢乃つうまと。まやうしをそ
孟曹司窟さ
つをゆりひて地しお縮めのとづいおいん
なとハざうしまいりわしてき夕世まず（りど）ひし
源のさつくそうて　まう孟とり様なり　ぶき人二三人わうはまつり（ノ夕リ．夕リ）
孟源とはすてんとうけさへ
絶ぞくられまふれの様とゆり紀いのりれ
末摘まよく　わひゆのしてまてのげ（か）らしおくつ。さら
末摘の気んげさしあうつと云よおそうてきるくし
しされ地をすりるへつてるひ咲めれバぞうじ
とはおすまろみげさつめすてゆそ緑を
集来るのさえ　孟源の　こはいとつさをぬけさ海とうらこのびらう
いしき海へつるれけるひらしうた海めさ
てうしらん人はてくさせ給んおするろうえん

〽あらぬかりつくさまりへくに
末摘のつまなきことを命婦か
中ならぬ迷惑なと源は
うくことせめられなかの其の
罪をさらんとてせし事に
より源の末ともとおぼしを
んなちりし末摘の心ぬ思ひ
やせらん也
〽さやうれなりしさうのに
当世風のうしわかきよりな
古代なる末摘の姫君ゆへ
しきう也　河　あしきなきを由ある
ゑんみゝ談はくる類也なる
みさんれ图のなり　孟同
えびのか　河　衣被香　又裛衣
被香　礼　香字抄ニ云採楠檀
樹葉皮并甲香故曰葉
皮又裛衣香俗云衣比
主家方裛衣香也これを
えひの香ともいふ一云薫衣香
の一名也云々薫物の名
之師武頭ノ掛香ともいふとも
いへり

あるまじきわたりを。あないとほしと命
婦は思へど。たゞおほどかにものし給ふ
をぞ。うしろやすう。さしすぎたる事は
見えたてまつり給はじと思ひける。わがつねに
せめられたてまつるつみさりごとに
心ぐるしき人の御物思ひやいでこんなどやすから
ず思ひゐたり。君は人の御ほどをおぼせ
ばされくつがへる今やうのよしばみより
はこよなうおくゆかしうおぼしわたる
に。いたうそゝのかされてゐざりより給
へるけはひ。しのびやかに。えびの香いとなつかし
うかほり出て。おほどかなるを。さればよと

おしてらるゝさ　細　うらうさはゞせ
らすハちきさとく　師　命婦がう
らさんとてつくる也とまり
てとく
いくそたび　細　いはひ又ちくちまする
細　わくは無言也　花鳥に只
えまり花童部の諺に無
言と行ぜんと約束して無
言くらべを賭よくをつくと
いひて何ともかたるゝして
のち物いひたる方をまくる
なりしいふハ是まくる也　樓鬱
ともそれハしやまハらぬりや
そらひからんくさそ也あるに
末摘花のいらへもせさせまじけれ
ると君のちをくまさらひものを
いふそはゞ傍り也物語ニハ
いはゞしくの世俗のことも
玉だすき　くるし　明　河海ニ
日本紀に引く　進退のの字
どいふうむ可擬と安發も
又そのさの進退にかけて堪
忍がたく物思ひそろうけ
なるかしぶそれは侍従也

としごろ思ひわたるさまなど。
いとよくのたまひつゞくれど。ましてちかき
御いらへはたえてなし。わりなのわざや
とうちなげき給ふ
いくそたびきみがしゞまにまけぬらん
ものないひそといはぬたのみに
のたまひもすてゝよかし。玉だすきくるし
とのたまふ。女君の御めのとご侍従と
て。はやりかなるわか人。いと心もとなう
かたはらいたしと思ひてさしよりてき
こゆ　かねつきてとぢめん事はさすがにて
こたへまうきぞかつはあやなきとわかび

今案八[illegible]当時[illegible]用[illegible]

て進退[illegible]此進退[illegible]

と従へ[illegible]天文八年五月十一日於議定所講談の時此[illegible]

日本紀曰俯仰進退而血泣懐抱云所謂言 垂仁天皇巻

細 [illegible]

河 [illegible] 師 [illegible]

[illegible]

細 [illegible] 源氏 [illegible]

師 源よりの [illegible]

[illegible]のこゝろ[illegible]

[illegible]

細 [illegible] 花 [illegible] 師 [illegible]

[illegible]

孟 源の [illegible]

細 源より [illegible]

[illegible]

孟 [illegible]

方

[illegible]

音 聞

[illegible]

すぐせられぬ人の
末摘の物ハくわしくのせ玉
ふかど見ゆ事にて源の占ひ
あつて
こらえても くされハ
くえおもとも何とかよ
なけれらく
みなみことにつきてかは
末摘ハからにまうり
みちらとおもて源よるひき
かくす事も今それハ源の心
よ思ふ人さ一筋まてく
ほどとりおもとこそうらひ
目さめまお物ハうらう一ハつてい
ホ遠り かけれトへつれと
ハ宮ハ寝せしたり
おかしうかしぬ
細 かやうの古人よ自然すまふ
人をいとはぬハしさしかにも
なきと讃しかくされた
人のしらればこの事にてとも思ひ
むかしさこと〳〵其源の

海しきよりかのことゞもこなたけ也ハいかにぞ
からぞむなかりしがうき世なれぬ人々
うらうしづかれさらとこゆるしあみかの
うしろろえぶ見なすまいとおかしと思ゆる
はさ海なり。なすみかごくまつけそうそれらく
かのとも海しんからきめられてぞふかくあはれ
ぬ。今姫ハいかすしんとめぎ給そてきこゆり
されどさわりうがうしとそ伝とくりするなも
こゝははくらはし思そやそこし思びて出給り
左ち二条院よおはしてうらかるひても
左子と思ひつまりうひびかさ世よゐをとおし
つてきそうたすかしぬ人のはずとゞん

ゆかりんり
源氏のことひなくしましまさず
くらりての御寝かやとの
あはれ
朱雀院の御事　朱雀院ハ桐
壺帝の御事ニ　朱雀院ハ二
条の御朱雀の所よおはり代々
の後院也
やうハわすれぬへき
嘆きくこえてめのまうせと
こゝハ源と同車して朱
雀院へおはしけり　右大殿へもお
あひなくまかりて　御使ハ
のこゝ二ハかうその待まうくるを
以大臣たちも人数へしも参りて人
きよ二条院へ御越えにて同車に
ておはしましけるをやしし
かゆ　孟　粥 鬻 𩱜 糜
周書云黄帝始亨穀為粥

ぐらしそぞはげしけうさひとらぶれてはし
ちうる頭中将はくして。ごゝよおはさはわさ
いかなゆへおそんりとこしそ出たひのあかる
まゝとへハはさあがりまて。ごゝろや〳〵さ
紅そりねの御まそてゆうひまかりうち
よりうとのてまへいぶつかまりそてとべは
まくなり。朱雀院の御事ぞふかんがく人
まひ人さゞせしうへさうしけら海うり
しとはじふとつてへやまさんとてなんま
うぞ御なかやうそくそうりまりぬへう御ら也
いそうしげなればさうハあかめしとてそ
われゆかはいひ給ひてまうとふあ

程いとはるかげなり
細 葵巻よりも以中将御法に
秋のうかなしいつは此時のる
也孟同 停二これ葵の巻に
あはく、ひのさやうなるし
秋のはなしきうぬきにあ
くのそきことももとさ
みまふ夜すく 云あしう
のへしよおう
かくし給ふこそとさま
弱きさされハ三日比よりよきお
まつ後ともまちもまつの方へりたまひ
この給ひと夢中にむて
せハいまひかぬをせかさ文
とぶまさま、夕されはつかハ
さかく云
あすへれきてどよろせくと申
まかきさかりつれへとまとさ
細 蓬のまやさかうに据へし
こ三方のおけき夢りまいうし也
やとをりし同とかけて、所為
かの意し末摘の方へは来り
人々ハ道ともいらくまさく

同源氏中車をつらねたる同車など
まうりあそびつでけれど、ちかうりよ無く
以中将ひとりれの御家まいわしとと云之
つまてかいしはなれけなりとゆくあまくら
細 紫式部の説之
くいたうしはたりもぞうしこゆめしますふ
孟 舞楽のるり 室らうく
ことにもかくきこめくうく日かくらくも
細 末つひの御方へ 孟 源朝臣
まさみつひくし給ひけこみけれをきそ
まされて まへ 案内
こふいくいとかりし見ろ出そゆへつうこそ
ありきうかりぞくとうろせくもあら
末摘の方よハ源の出おとまらしく
まぐるやどもきんととこ殊頃されぬとや
ありきんりしこせは出け同性としてぞまへ金出
内よりなく
もいとくおしのきは夢うあつし
まむへ
ゆうさうしそへまむのうら
うちのひでけれそけさのれはくそのくらしおう

かつよれハしせの方もおく
それハ末摘の人とハれが
られしよの方る比く
夕暮れらて
花 夕暮れらし中比ハ女君
まうとつくし 細 人ハおうく
雲まうらうん比ど
花 鬼られハおゝ御らんとく
いうまんりしおく
いまふりしるやや出でて
つんとうて共へうこと
どこし
えりこのやうみを 久の実
付ゆえ斤のさられやうに
とえでみゝ夜りぬげと
なり
これぬ夜の
孟 みるおしふよるゝ比に比
しかしやれくこうく紡
せとさ比おかなさくく 細心
わさしりく

もろとりまけゐ 細 源氏の文の真くおかかども仍
もとうりしも出りひ、わさつくこ
まう
源 末摘の方よけのみ常にさうさうく
夕ぶりれらしもいとかなしう
分きくさく
いふきをまふりしひのおあるを、雲
ほどいうまふ出りしなうくとおはり
末摘の女房く
あかれとく 孟 今夜お出おんと
おじきれはしそうと、つくしむ
有わそ云あへとし
へどかなみしせまへ出てうくの
末摘くへのえらうまうれゆゆく
どいくどひくそれみへるほどか
このやうみをつづけ給ふれば
赤つと仍仍末摘よらうられハ例の
そ仍夜ぞ例のしへぬこ様り
末摘
これぬ夜の月ゆ門里をゆく
源の出お方さをとうく
わよなりわせ比とをらくよ

らひとられなりめつらうは
細 紫の色のかはりたる也業
は八年をへたればいろかはる也
灰といふもそれなるべし灰包の
とくれたるとハ灰のいろ同事也
和哥のかくのさまぬ
ぬこは八文字がたのしづかなり
師よハうきとひとしとされた
まずぞましうつりされ共
の手もそハしらはしくれよく
中さこのすぢにてそ 河 中央
さゞこうつたに見合せ
しし花 中さこハ中比の手也
く 嘵 中古のやうにてよろし
くりね 細 中さこハ中
古く此わ終末をよ仮名八
代ようりて らくがら様よ
みの今害よ中さこ筋と
あるもそしるらるさね
く事とらやしなじいふ
みや みやうのすこ源のすひ
あね紅く思ひて上臈の
料なるらし孟作られんから

てしきれの・としへにければはひ
おくれふるめいたるに手はさすがにもじ
つよう・中さだのすぢにてかみしもひとしく
しくかいたまへり。見るかひなううちおきたまふ
いかにおもふらんと思ひやるもやすからず
かゝる事をくやしなどはいふにやあらん
さりとていかゞはせん我はさりとも心ながく
見はてんとおぼしなす御心をしらねば
かしこにはいみじうぞなげい給ひける・おとゞ
夜にいりてまかで給ふにひかれたてまつりて大殿
におはしぬ。行幸のことを興ありと
おぼして君達あつまりてのたまひおの〱

の笛法よ云くあそびいふかや
わかんといふり
みひらきらとうら
河 大篳篥（オホヒチリキ） 律書圖云大
篳篥小篳篥又云尺
八為短笛 尺八詠尺八
遊仙窟長一尺八寸古四
寸八分 河 とのせめひろり
さよりもとなりが着八言
一尺八も一尺八寸に作と
うりふうありしまで楽
笛よ用く
さいことう人 細 元るの勘例
有鹵 花 礼記曰鐘鼓在庭
琴瑟在堂云々 延喜四年
三月廿四日覧舞楽御左
大臣時平公令雅楽太鼓階
前自打之云々 今案太鼓
ばらうは堂下にてうつべく
但寛治五年五月廿五日殿
上競馬六番之時主上 御
于太鼓給此時置堂上也
孟子ノ西ハ地下の役也ハ各の
わらもとし因ハ宰しらく

まひどもならひ給ふをそのころのことにて
すぎゆく。物の音どもつねよりも耳かしがましくて
かた〲いどみつゝ例の御あそびならず大ひち
りき尺八の笛などの大声を吹あげ
つゝ太鼓をさへかうらんのもとにまろばし
よせて手づからうちならしあそびおはさう
ず。御いとまなきやうにてせちにおぼす所
ばかりにこそぬすまはれ給へ。かのわたり
にはいとおぼつかなくて秋くれはてぬ。なほ
たのみこしかひなくてすぐる。行幸ちかく
なりて試楽などのゝしる比ぞ命婦は
まいれる。いかにぞなどとひ給ひていとほし

高砌のもこそ君らくれさら心がくれ
こらまゆかりて示うりはそめそてまくられまへ
而ひわりさ改くとく師
まく 註 試楽也 楽のすりしく
りそこらまれさら后知える
末摘への深れかん飯ま打ま
こいまとらしころ令嬢る
とかまえ笑思まえ
こらみつりそさりて
師 令嬢りかりくさ海ま
つひ てきるんとせしと見
わしつし紅り令嬢もへかま
らっしんと紅梅のきえく
ちひこ給りひりなく
令嬢りわくせらりしひを
やしらてそおしちて
逢かひしんのふくらりし
の今へ其給しすくてく
ニーー付ん
註 こちきまんと云本あり
うつれらうわり
戎狄是伐荊舒是懲
毛詩 一箇仁

りなのんまらしみられまま
付しらひや
細 しらひハ鈴とえハすかひと夜
此とらしかや 作 深の鈴
のらくれらしまもと云ひ
やりなさゆへ令ハ恨とられ
おわらへしじひハ去跡と
云二目代鈴のりふと同じ
とそと
ふひやりもくなく
末摘の深とつらくやとひ
みんなそしくはりひやりとら
るしわがまくるれありは
深の花らしわりさゆへきれ
ハことらりとせあく
雨せきりのもら
末摘の袖らしかそてま
なみるとのめへ多さくとそ
れどもあかしこあしきんと
ことあく
うらえしこきそり
恭ま心的と窓まつ邦し
とせりゆらとわりしや
まあやしくてちら乃

細 深切りる赤へしそ方をかたいやうして
まんかる帰らそらしてはとのみてかかなく
末摘の花と深へ令嬢より
まんりおろ猪らずらしていとつゝかりそまるれさ
ろれんもだらへいとまかみろんすへらろぐうしく
ちどるすうぬびらりよそろりこうろふて
深のくへ
りそなしてやまわんとせてしこしたま
同 齋多
らざいそげらもろりとすこのん付とふ乃人
まつひく
とへ背をさうじとれまのとしへうそあ
ふのまらにのまとられまさんとく
かしうかのれさまかうんさ海と海ひやり給
細 深の個之師 作業折 宗久之
かといてかしそれべいつく海なさら見じずやり
令嬢の心りゐをまろしのまづく
アきまとらちろけいのへてりのせひまうら
細 わまりま摘の花まろ
まりとくまんあとく
ねやうりらいきなこうきんとせかそり

とけあるし画るわくてゐりくしすゐ
細 令嬢之
とばれもうちなきいらて花してゐりる
のへとうしきらんあへいしょとひやとひや
去深の帰りとまられきやかうるとるる
つまさくなかるいちへのものまらんもつしとい
とし令嬢へ末ぐしてしとく
とゆりかこれいそごとの積をそしてそ何さ
細 紫君二条院へう…ハ作業
ゆらしけらかれむしくうはのゆりうつる
いよかりありまて
とも給ひらくへそのきいらをまんいうろ給
末月の出て
て六条まろうりのよしにかれまるりのるか笑
まつひく
れバおしてあれきうやといかられぞかう
うけんぶのきらかれのく
しゃうつびあずるむかうろそわりる
うりけゆ雨そのさい袖らりとまわしらいさんの
けんとしるよおぼくてそうぞゆくとうしろ

ほさうなれのさくるさま又引くへこみすさりやさん
孟 鼻は不審なるべし 師 奥に
ミ猶考べし
くしへのこのさいらとりて
ハそしやうゐしにまかれねハ
孟 ルーちしそのまくあり
木丁のふそくわりあれもむ
りのたちどかはらぬとゝをと
しやりてとうしみとせ
そあるこく 孟 御台(だい)
細 沈膳也
ひそく 孟 秘色(ヒソク)今の茶碗也
秘色ハ磁器越州より出る
ものゝ其色翠青にして殊
にすくれたり仍て是を秘
蔵して尋常に不用故に
号秘色 河海に此分也
取要哉 花李部王記云
天暦五年六月九日御膳
云々ひそくの御器に云々

へしつまかりけるをおはしてかうしのはさ
まより見給けりされど身つからは見え給へくも
あらず木丁などいたくそこなはれたる物から
年へにけるたちどかはらずをしやりなど
みだれねば心もとなくてごたち四五人ゐ
たり御だいひそくやうのもろこしの
ものなれど人わろきになにのくさはひも
なくあはれげなる

れつきゝ今茶碗をハあをさ
茶碗のれをと云也
まかでて
退出也 未摘の花とおなしこと
河 毛詩 退食自公
まかでて人をられて
細 古詩 明 陪膳侯某
八御をさしてた義く
師 とられてとハそしゝ
なさきこゝろえへし
きいけう 河 内教坊(ナイケウハウ)
在大内 孟 今の大よのなるに大内
裏にありけるん内裏の女
女の候する所へかかいれる女
也 學海云 被守古風衿云々
ほ 内教坊ハ女の舞なとし
なるぐる所ハ内教坊内侍所老
女のつとひの所なれハかく云
あらせまう
命ながければ 河 荘子云 寿(イノチナガキトキハ)
則多辱(ハヂオホシ)

まかでて人々くふすみのまばかりにぞ
いとさむげなる女房しろき衣のいひし
らずすゝけたるにきたなげなるしびらひき
ゆひつけたるこしつきかたくなしげなり
さすがにくしをしたれてさしたるひたひつ
き内けうばう内侍所のほどにかゝるものども
ありけるはやとをかしかけても人の
のあたりにちかうふるまふものとも知給はざ
りけりあはれさもさむき年かな
命(いのち)ながければかゝる世にもあふものなりけ
りとてうちなくもありこ宮おはしまし
し世をなどてからしと思ひけむ

とびたちぬべく　細 貧窮問答の哥の心あり 河 世中をうしとやさしとおもへどもとびたちかねつ鳥にしあらねば 万葉 貧窮問答の長哥の反哥也

そゝや　師 [illegible] 新古今 [illegible]

侍従は斎院に　細 侍従は [illegible] 斎院 [illegible]

[illegible]

みなくてもすぐる物なりけりとてとびたちぬべくふるふもありさま〴〵に人わろき事どもをうれへあへるを聞給もかたはらいたければたちのきてたゞ今おはするやうにてうちたゝき給ふそゝやなどいひて火とりなほしかうしはなちていれたてまつる侍従は斎院にまいりかよふ若人にて此比はなかりけりいよ〳〵あやしうひなびたるかぎりにて見ならはぬ心ちぞするいとゞうれふなりつる雪かきたれいみじうふりけり空のけしきはげしう風ふきあれておほとなぶら消にけるをともしつくる人もなしかのものにおそはれしをりおぼし出られてあれたるさまはおとらざめるをほどのせばう人げのすこしあるなどになぐさめたれどすごううたていざとき心ちする夜のさまなりをかしうもあはれにもやうかへて心とまりぬべきありさまをいとうもれすくよかにて何のはえなきをぞ口おしうおぼすからうじてあけぬるけしきなれば格子手づからあげ給ひて前の前栽の雪を見給ふふみあけたるあともなくはる〴〵とあれわたりていみじうさびしげなるにふり出てゆかむこともあはれにてをかしきほどの空も見給へつきせぬ御心のへだてこそ

おびくしと
わかうさせまへ　孟 老人〱
とり末摘はいかゞみて
あぢきなしと也
孟 黒貂

うらむはすこしりれ
細 源のいさゝかうれしからむも
やさしくいふなり
あながちに心をうごかさせ給ふなる
君長 せいたかくとせなる
がさらなのそげきことあらん

れにもみえつれ
源の心はゆかしかりしに
ひらにてあるまじきに
あれども
ふげんぼさつのりもの
河 普賢菩薩乗白象 鼻
紅 連華色 観普賢経
細 末摘の鼻のさきあかき也
しけり
ゆきはづかしく
河 そ〱しく 額のたかきこと
或説二 腫 云々
しらがちなるとはいふなり
まで見えぬのうへまで
孟 痛 かたの骨 肩
くみえしと
すこしもかたの骨あらはなる
たゞあらはに見えしを
もしくもあるまじき

せぬ御こゝろのへだてこそわりなけれと
うらみきこえ給ふ。まだほのぐらけれど
雪のひかりにいとゞきよらにわかうみえ
給を、老人どもゑみさかえて見たてまつる。
はやいでさせ給へ。あぢきなし。心うつくしき
こそなどをしへきこゆれば、さすがに人の
きこゆることをえいなび給はぬ御心にて、とかう
ひきつくろひてゐざり出給へり。見ぬやうにて、
とのかたをながめ給へれど、しりめはたゞ
ならず。いかにぞうちとけまさりのいさゝかも
あらばうれしからんとおぼすも、あながちなる
御こゝろなりや。まづゐだけのたかう、をせなが
にみえ給ふに、さればよとむねつぶれぬ。
うちつぎて、あなかたはとみゆるものは御はな
なりけり。ふと目ぞとまる。ふげんぼさつの
のりものとおぼゆ。あさましうたかうのび
らかに、さきのかたすこしたりて色づき
たる事、ことのほかにうたてあり。色は
ゆきはづかしくしろうてさをに、ひたひつき
こよなうはれたるに、なほしもがちなる
おもやうは、おほかたおどろ〱しう
ながきなるべし。やせ給へること、いとほし
げにさらぼひて、かたのほどなどは
いたげなるまできぬのうへまでみゆ。
なにゝのこりなうみあらはしつらん

うみの里へハのまゝ法
濁而読之阿闍ばくさうり
鳩因事く師見ゆるれさ
うりハとみえし

ゆるし色　細　花鳥説可然
花云延喜十七年参議三善清行請禁深紅衣服奏議云但浅紅軽黄未及夫色着不在制限云々今案紅を
紫深色禁色しけ浅き
をゆるし色として制禁にあらず
よりて但し色と着るを禁色と聴されて着用
のおりハ深き色をゆるし色と
いふ説ハ誤也　晴　紅の薄
色

ふるきのかはぎぬ
細　ふるきハ黒貂也　河　貂裘　大貂
ひとしく女もこれを着るか　或説云女房
ハ着べきものならず　花云　袿
ハ大小あり小袿ハ宮一の人の
おほしきのつもなく　ぬの上

すべて法ハ次第にくしまきりへかめしくそく
ふるきのかはぎぬ　河　貂裘　貂　和名　ふるきと云歟　西宮記曰除時条蕃人帰路着黒貂皮衣也
又拾遺云中宮大夫　ふるきのかハきぬと云を入る横川よりも仍ての返しとて入れと
山八宰しへきるれハ公卿ハ風をうへ　細　昔とハ見ゆる八瀬近とく　明　花云江次第云
背蕃客参入取重明親王乗鴨毛車着黒貂裘八重見物此間蕃客以件裘一領持来為重
物見八重大歎云々
ふるいのゆゑづきたるゆゑ
そくなれど　孟　古代なり
こたいのゆゑかハ古ハや
つまりかなれとなるまじく
不似合なり

これらによる
末摘のかほのかたちに対して
これ見ゆるとなる
例のしゞま
末摘の心ばへのかたきをいふ
しづかにあて例のことなり
末摘の口とぢたるをいひ
なまぬいしいみまりんとて
とたちれ

とおぼゆるかしらつき（頭）かみの（髪）かゝりばしもうつくしげにめでたしとおもひきこゆる人々にもをさをさおとるまじううちきのすそにたまりて（髪の末の事）ひかれたるほど一尺ばかりあまりたらむとみゆ。きたまへるもの（女の装束）どもをさへいひたつるも、ものいひさがなきやうなれど、むかしものがたりにも人の御さうぞくをこそまづいひためれ。ゆるしいろのわりなううはじろみたるひとかさね、なごりなうくろきうちき（是より装束の品々）かさねて、うはぎにはふるきのかはぎぬいときよらにかうばしきをきたまへり。こた（紫色のうすきもの）

いのゆゑづきたる御さうぞくなれど、なほわかやかなる女の御よそひには、にげなうおどろ〳〵しきこと、いともてはやされたり。されど、げにこのかは（末摘の事）なうて、はたさむからましとみゆる御かほざまなるを、心ぐるしとみたまふ。なにごともいはれたまはず、我さへくちとぢたる心ちしたまへど、例のしじまも心みむと、とかうきこえたまふに、いたうはぢらひて（末摘の事）くちおほひしたまへるさへ（袖にて口をおほひたる事）ひなびふるめかしう（田舎めき古代めく）

ぎしきくわん　細 儀式官と
て弁少納言内記外記史など
を云 [illegible]
明経政のうち 師 式部官ハ大
政官をさす下の政と同じく三公
納言参議などの下につきて
の事どもを行ふ官人 此弁
少納言など公事のかし
かの時の作法とゝのへて
[illegible]ておほく此末摘
の君の御衣装[illegible]
[illegible]似たると也
[illegible]
孟子の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
朝日さして　細 今末摘の君
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ことことしくぎしきくわんのねりいで
たるひぢもちおぼえてさすがにうちゑみ給へる
けしきはしたなうすゞろびたりいとおし
くあはれにていとゞいそぎ出たまふ
たのもしき人なき御ありさまをみそめたる人には
うとからずおもひむつびたまはんこそ
ほいあるここちすべけれゆるされなき御けしきなれ
ばつらうなどことつけて
あさ日さすのきのたるひはとけながら
などかつらゝのむすぼゝる覧とのたまへど
たゞむゝとうちわらひていとくちおもげなる
もいとおしければ出給ひぬ御車よせたる中

夜めにこそ　細 夜目ハ[illegible]
やみの[illegible]とハ云なり
[illegible]
[illegible]
[illegible]
松の雪のみ　細 只雪の降つ
[illegible]此松の
雪ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
松の雪[illegible]
[illegible]
河 [illegible]歳寒
霜雪よりも[illegible]松の
[illegible]
前[illegible]松よ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
うよ 師[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]末摘の君の御[illegible]

門のいといたうゆがみよろぼひて夜めにこ
そしるきながらもよろづかくろへたる事
おほかりけれいとあはれにさびしくあれ
まどへるに松の雪のみあたゝかげにふり
つめる山里の心ちしてものあはれなるを
かの人々のいひしむぐらのかどはかやうなる
所なりけんかしげに心ぐるしくらうたげ
ならん人をこゝにすゑてうしろめたうこひし
とおもはゞやあるまじきもの思ひはそれに
まぎれなんかしとおもふやうなるすみかにあ
はぬ御ありさまはとるべきかたなしと思ひなが
ら我ならぬ人はましてみしのびてんや

秘合ぬこゝわをらく
らくへとさきまひうん　表のた
まうゐと此眼さこにらくへと
さまうひさんとく
うしやくりかよ松の
西白句く橘の雪はらしられ
ようらしやミ鳥よ松のうれ
と後のゆきさうらく
名よしる末の　細川前子
雪又只雪のさとさ云之明　秘
袖ハ名よしる末の松山か空
よりり波のこゆねほとりしれ
滴らく流ゝ　皆ハ白波乃
末の松山ことさらしそ見て今
来は古今一首こゝみや嘆意
よ滴らくの秀あり此時の
とぬころやうに名まりわさ
袖こゝの個とゝ又松山の波
とゐけらん
いとあくらんとも　師子さに
さましくしてこそあんあらん
人もらしこ末摘の云ひるさ
とりけさあからさく

常陸宮之　末摘の紋は杖のくろうね
やハわがかうあれたるハ、ちくみこの、ぐしろめくさ
つるあく　師古云のくまうゐのあうしやあらこし
しとうざくへとさ絹くんうありゐのしるべな
めりとぞゆかさかく、さらどられのきれこ川　雪まよく
れさう、さとく、ぎん絶えしてらしいとをまふ
うしやミがほに松のまゝのおのれゆきさかへり
てぶとこほるゝ雪もなまるとも川となのとく
ゆうたじくとりてみくらんたじくくうり
行よあひさうらん人もがなとまあれし
まいり川べきうじハきさあけざりされハ
のあ川うり(ゐ)ねあつれハゆうされのいとゆる
年よりうらく　義のあまる孫う孫うらく
じらそおとさるゝむしきめりやむまじつりや
河まうく騎倉くみくらこのかくし　師子さく孫とも年よりあせい
しうる川ゆ個ささの女乃さふねハゆくさよあひ

ことゝをよけさあからさく
さりとてぞ事りしてまし(く)
こ句あ直子し孟孝まさくへて
一段さうしけてくゝくさる(く)
大ともくあのうよ　細納乃
うゑへ　師　さもしうかと
ましとわくうこめん(か)今
世の史猶あくぐらのいれて
袖のうちまりらのゝらく
みりよまさ　細川肩乃袖
ありうしもとみら人の秋ぬ
まきてうくしくわさの袖く
あしさの袖く花あさこの袖
ハ綱の袖く河秋の神の
深まあし綱の袖うらしも
あうそめり夜そむらま
さりまら
もうさうのハ　細
古来只此花の名桜を見そ　素中吟とり
頭しるふとけのらめのか
あさらんどもとはうりそのへハ
つくしうろま歌く前よ風
吹あそそみれそゑそつくさ
えさみんるどくりしつる
人ありあしうくうしへり

てらしあゆ(ゆ)ひさむしとけりへあらあ(り)くあ
かゝてむやしき梅よ犬とくごはのうよ
みれて袖ぐてあまあもらりゆされじとえあ
あめうねはりてむさうくれいとゐ　ある
くたうりばりもの人く、てそわあつ
深　かりよくうしらの雪をみる人ひとう(う)
どめうれあさ此袖られ、又ねののひかうら
源氏の母し云く
うれさく折ども(ま)ひて花の色よいそ
鼻よまろへてのあかく
くいとこむしとえてつはおもうけ。ふと
まつむく　ゆるく
ゆすひいぞられてゆくあまれのふ歌中ねよ
とよ
これをさをうへん時いらうらしとよそ人
以本像を書てあつひあらく　ふくらへさ
いうんつねよりむひられど、つまさ川まう

けてみるべきハ此村よ法をしてかへし[illegible]
なりへしぶりにみえハ秦中吟の[illegible]
陽上宮人[illegible]眞中辛 明秋[illegible]
花鳥 初音ことをいとゝしく[illegible]
いまよ川あこれなん
細 只[illegible]付しるへ[illegible]
[illegible]
よめつなりつりしくれてしるらる
こしきこちくらし
末摘の[illegible]のつれけさせる
[illegible]
源の[illegible]てもとし人も云
より[illegible]未摘の[illegible]
源[illegible]人の見む[illegible]
[illegible]
て[illegible]して源のこと[illegible]
あぬく
まめやうことし物あるぬ
こゆやくよ内儀の不自由
なるくと源の[illegible]
わうえん[illegible]
逢[illegible]末摘ハ[illegible]

れすんともへかうり思ふしのつねなるらね
細 源の性[illegible]
どのこしかろうしこそさあらしく[illegible]
くもやみぬべきをさそる[illegible]ひてハ中ちく
あかれよいそじくそ[illegible]
つるまとつま[illegible]
源 仲
ぬあやわうこなうし老人九の[illegible]
末摘の[illegible]
さひかの[illegible]
しまりて[illegible]
ごともそ川りしあすしぬとなやもそくはる

てん摘のうこれう[illegible]
末摘をもろうまんてみめ[illegible]
の空[illegible]
孟 空蟬[illegible]
[illegible]
描の[illegible]
[illegible]源の
[illegible]
[illegible] 師 源
[illegible]
[illegible]
末摘ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
内の[illegible]
[illegible]
源の[illegible]
[illegible]

[illegible]
孟 [illegible]
碁と弄[illegible]
[illegible]の空蟬の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
細 源十八才の年の正月ゟ
[illegible]
[illegible]
やまとことよのあひをさそぐれるる

あやしきことの
末摘より源へ正月の召料とて衣ばこおくられしを
命婦取つぎてみやこの詞く
源氏へかしこまりて申す詞
なり
ほゝゑミのさま
西 命婦のあやしきことを
よく似せ[illegible]と源の[illegible]
ひたすらの[illegible]詞く
うらみごとも[illegible]
田 清細く 解 命婦が[illegible]
の上乃[illegible]
一つなき[illegible]
こまやかに[illegible]

どしてつひゐたまへれば、めづらしきこと 源の召されし御下にとく
ほゝゑみ、こゝろへきこしあるを 源はやゝ上へつゞきてあれハ命婦のすゝみたるかたにとく
のかり、あやしきものゝ[illegible] 細 大輔の命婦の詞く
えさせざらんとひがひがしう
思ひたまへわづらひてと
ほゝゑみてきこえやらぬを 源の詞
なにざまのことぞ。我にはつゝむことあらじと
なむおもふとのたまへば、いかゞは 師 命婦詞いかゞは包こし侍らんや
みづからのうれへはかしこくとも、まづこそは
ときこえさせにくゝなんといたういひこ
めたれば、れいのえんなりとにくみ給ふ 源詞 風流めくと
かの宮より侍る御文とてとり出たり 細 常陸宮よりと 命婦詞 源詞

琴のねもかなし 細 極紙也 明 陸奥よりいづる 孟 日
のかみのあつごえたるに 書ゆへしこへ(?)女の文とさのまゝ
いとようかきおほせたり まいりて[illegible]
かの衣こそ[illegible]ん 師 源のとゝのへる用に
袖ハふくめれなりとえさいて 源へ御装束をまつる事
とやらかく今やうの方なく 細 給ひて
[illegible]て[illegible]にはかなれ 細 被い
[illegible]かりたる[illegible] 何そ別に
細のあてへきことゝ不審し給ふ
つゝみ[illegible] 畧 綾泥繪 衣筥 前繪 見 平貝 延喜式
衣と入る物也
命婦か方より[illegible]
ミより給き[illegible]
末つむの[illegible]源は

とりたまふも胸つぶるゝ。みちのくにがみのあつ 命婦わろく
ごえたるに、匂ひばかりハふかうしめ給 香
へり。いとようかきおほせたり。哥も 命婦はよみしとおもふ也
末摘 から衣きみが心のつらければ
袂はかくぞそぼちつゝのみ 源 こゝろえずうち
かたぶき給へるに、つゝみに衣ばこのおもりかに
こだいなるうちおきておしいでたり。これを 古代古風めきたるを 命婦詞
いかでかはかたはらいたく思ひたまへざらん 元日の源の御装束とて進上せられしと
されどついたちの御よそひとて、わざと侍
めるを、はしたなうはえかへし侍らず
ひとりひきこめ侍らんも、人の御心たが
ひ侍るべければ、御らんぜさせてこそと

又せまりつゝせてこそ川あ
とせたま御りくめりく
袖すらほさん人もなきさ之
細 濃き(?)ハそふハるまりそ白め
の袖すらきわるん人もあゝゝ
あくに 師 源の御袖ぬらくと
てお泥わろき人をあさきにま
摘の御志ハ嬉しきとく
あれてそハまつくう 師 実の
まつきてとらめんうすハと
かうしと拝くらハおやへてご
源あやしくまひてまつむ
まのおりしときこうひきのり
かき紙よそれも給侍るかりし
このうらま空あへうまりる
なおやくそ数まを花ハ末摘の
まづへくのまうんと出(?)し先
わうくし
まちくらでの思りとさよろせ
そのたまへうさと 細 さらせハ
誌なま師とりふやうへし
とそしへいて人もあらりる
かくし

細源の御心なり 師 末摘の御志とあかりてのま御心
ことゆれハふりこあくれやんハうくうりきまの
袖すらほさん ひくもなさき男まいしくれ
さらざりまてそいしのおひてこよのい
そ 源のあさくれかふさ海く
くれまかりぜさてもわさましのくらは
源氏末摘のもと…へ…しのみくく
さや、これこそいまづらしの吹しるりろか
色ら侍しそいとりちくともへうかれかこぞの
きうとろきつせぞちらうへきていふかるく
おほざつろとほくてまさおまへしん打と
ふつむあんのさうりのこにまれハ常とくるとあられとい
とありするいとりしこさいそれと
さんとわくまくりて出りとくく
こいふへうりきりと伴く見ゝこのきを
淵
牡丹(?)カキカハ漢語抄
令婦いのりてあっくてこすらいまやう名のえ
紅梅のこさきとりあく
つやくいぶくときとこうやあらハろうかきな孟つや八光のり
うかやうかうめのやこしるまつ

さにハぬく 花 河海抄花物語云法成寺御八講数玉 紅梅十二とあり云々と中納言の局かうかうたる
又ちかりてうろくしの今やうの色やとや
いまやうの色のうつりきさ今案 紅梅のこきさ
色うつて件ひいてさようとされハ紅梅
ハ紅のこきこうてはちうされハ甚ふる
あとしのうくへひかしく
細 ひとりしときぬまちへち
く當世の五衣といふへしもを
上古まハ東西紅の五衣あう
しく 商代ハ赤紅は赤色也
まうさぐらうし上古より紅田状をには
あかりしなり
明衣の装束抄云 法成寺
関白直衣布袴紅梅織物
直衣紫織物指貫皆練著
之寛弘四年三月五日法
成寺関白左府行曲水宴
主人着桃花直衣柳色指
貫山吹御袙永久三年十
一日十四日五節童御覧
日法性寺関白紅梅浮文直衣
萠木指貫皆紅衣 花上に
ひる今やういろハきぬとえ
この直衣とも今やういろの
うろとりて同色ながらそあや

師 濃紅の直衣之 河 表裏濃紅 旧説
のうへんまろうすみやうるうりとてる紙
くしうまあぐそそこうりあしまかりし出る
くぬまくのえとしるく
こうにおそをとひろけすかくちうまもてるくひ
令婦かえらくし
まさひろぎえはめよされど
源
なかしまなえともにかみの末
つひとれど柚よふれきんいろころきるると
うしろどもやどうさあふしろ西のくされの
とゞめ様なきあうやうあらんと出りひ
あるもすらはくの月うけなと様いつれ

なるべし。さ　細 源氏は梅の紅の花をながめ給ふ也　河 古今集
そのゝとかく古今 人しれずおもへはくるし紅のすゑつむ花の色にいでそめん
てまつりつゝ前にゐ書捨花とあらく
いろこそことなるとこそ見ゆれ
紅の花なりけりとおもふ人とあひまゐらせん
ことのはの　細 令嬢の紅の花
花の色　細 紅の色こきを花として源氏の御もてなし
蘇の月の 細 令嬢は今ゆる春をおもひ 細 今めく源氏のいにしへの事を
梅の花の月の月よき時　細 令嬢に月夜のごとくならん
よるつきて月の花の令嬢の明
八月なる　細 月夜の令嬢の事 細 月の花は令嬢のこと
翁も　細 令嬢のさまにて是は令嬢のかたはらに
孟 笑之
細 令嬢の事なり　師説 もとは令嬢の
紅の花ゆへ令嬢の花
源氏の御心にかなはぬ事也
細 令嬢の事
八せめての令嬢の源氏の心うつりゆく

あさ抱くしおもしう　みかりかたり　絶

河 詩 白氏文集 日本紀
それなるねの色にもれがろよきう　ひ
よもしらんなをもうそをいろうし
のもとにいへゆうたてもこそ源氏との
すゑるはあくねとうそうのたいにん
源のれん　孟 そうした
大きの人く
のはものうへかぐしこうしに
源の詞　令嬢の衣と源氏の
はらすかたりんで東れはとりろんや
細 衣と源の蔵
よくなどは人のもの物みやあるとう
細 令嬢の事 孟 氏の事
うめさあふなめて何らんをさせつ紙
よんうろなまやうゆといしそうそ
令嬢禁中よ
やそしおりぬまこの目うへまさうもそ
大盤所
いさん所よさしのそこまてくうや朧月の
源の詞
くりこともやまて色なこともうくるりやう
孟
てなけまうる白屋連のあるいへもとゆ
嘘 風俗と紀高にあり
しうるうて梅の花の色れてしみる月の
子孫の事
のときあそくとうそうひさそうひてまめ
細 令嬢の事
ひめうと枝令嬢はいとおうしとあふてある

しるもうもり
ごとらんありて　細 ありて
さてうんのゝ師 何東りもり
府生の君の
もうや雅日のえりうし
細 ならば
孟 さて
文字かりやうるゝ
あやしくらんなく　細 用捨
せ花をまいらせらるゝ
京へくきんのうちは常
陸宮の君を信せらるゝ
と源の意かしうおもくし
こ梅の花の色れてしみき
山のとくめをかへそく
細 求子の詞へ源の口よきさ
ひゝ秋子の表目をて上登
の山形とうひ又他所ま
てかと左所
うそうの源の心は急うて
八常陸の色おもしろひく
思給へ鼻の文とさして
おも給へ此義秘説なり

花故事要略、衛門府風俗哥ニ云、ぬ夜女の花の如加以袮利好年夜城紫色好年夜

つ花ハくれなゐの花也

いふをさふ梅の花のえくく源ハのゝあへ

ちんしめく末摘ハ常陸の宮の姫君なれバ

常陸の社そくふ附ちの

まこへこハ三笠の山

あり御袮の社ありハ

のりて春日なる三笠の山乃

あらず雲鶴

細 令嬢のなりてらく 明 花

さるまは

女房の

らぬこハ

訶へ

やあらつん

なりたらハわか

雪中

ろし紅の色

左の令嬢服飾の末女や

花 毛赤一人の女房の細く

近令嬢ひめの末女鼻

あらち女二人

らぬんぐさぞれ独ちゝく

色りおくびまひとき霜あきうまいねりこ

けめる花の色あひやこしつらん

うきのいとむしさいへいおみうち

こうれしのあゝはぶめへる花そなくめり

左をの令嬢ひこのうひめやましらひつれん

なをむかえずひしろふけうそしま

りりまれじわいい女ちらしつどひへ

でき々り

源 やおうむけ紙笠ろう中のうちりそまう

さねていくげさりしみすとやおろさへ

てひまへる言りそ花くゆうしげなり濃く

めりの面ゆようえさうの衣もともまたれうと

て人のなかうちそひょくえひそあれなど

りのくれそえやまあつさかたふそいろくうそ

て令嬢ぞなりろつりしいきあひどめ

しやとあひきんとおひあれとれ

ちとどうれおるの柳もくしうさしやさ

ながくもさえしじとねひんともさびるゝば

うれなかられよりのてしこのびもて

末摘かこの年よりはと女房ども批判しあへり

男たうか　年始の祝言を奏し舞てめぐりあるく也

河　男踏歌八聖武天皇天平元年正月十四日始有
男踏歌女踏歌ハ天平十四年正月十六日天皇御大安殿宴群臣酒酣奏五節田舞更令少年童女踏歌是踏歌也
花鳥にもみえたり

公事　節会といふハ和名に
白馬をはあをむまといひならはし
武天皇十年正月七日御向東殿宴群臣　礼記ニ春
と東郊にむかへて年の七匹を
用ひられし七ハ陽の数
正月ハ陽の月白ハ陰の色
又馬ハ陽の獣に[illegible]
白きをとこれハ年中の邪気を[illegible]

したゝかにこそあれ御かへりはたゞおかしき
方にこそなどくち〳〵にいふ姫君も
おぼろけならでしいでたまへるわざなれば
物にかきつけておかれたりけりついたちのほど
すぎてことしはをとこたうかあるべければ例の
ところ〴〵あそびのゝしり給ふに物さはがしけれど
さびしき所のあはれにおぼしやらるれば
七日の日のせちゑはてゝ夜に入りて御前より
まかで給ひけるを御とのゐ所にやがてとまり
給ひぬるやうにて夜ふかしておはしたり例の
ありさまよりはけはひうちそよめき

さやゝかき　婀娜（スラヤク）　遊仙窟　窈窕（ヨウタウ）　なまめく
あてやかなるさまにもてつけ給へり

けはひうちそよめき世づいたり
ひめぎみもすこしたをやぎ給へるけしき
もてつけ給へり
いかにぞあらためてひきかへたらむ時と
ぞおぼしつゞけらるゝ日さしいづるほどに
やすらひなしていで給ふひんがしのつま
とおしあけたればむかひのらうの
うへもなくあばれたれば日のあし
ほどなくさしいりて雪すこしふりたる
ひかりにいとけざやかに見いれらる
御なほしなどたてまつるを見いだして
すこしさしいでてかたはらふし給へる
かしらつきこぼれいでたるほどいとめでたし

ゆくおもしろもし物かたりに
孟 前よりおの時奥とこん
つけられしにこりありて
あきらかなるそこ海くそ
細 上下つゝきたるにこれ猶
みかたくたしとの紫震殿
あいのみゆく孟氏猶よれ
きまつるたゆへし
あうそくいぞしよせん
孟 源の勝息よらおり
ておつせしらく湊巻よく
ちらしりそて御鑑のそうけ
うちとうくのひあめく唯
きれうとひさこのあの
おうへし一注孟もさ源
からしめ侍
こさやうみのうらしてけり
けのくこあり 河 鏡臺
唐匣 櫛上匣 櫛髪貫乃
具入るうち一揃うらり
同し
さまも物わりしうらん 源氏り
なりぬ 物かし 供宗と云そて

まへいふしおかしるべしりのこゝろよあざ
かくしてとへ海てゝけうそくぞうしをせ
てうちうけて御かんのさのあらけなきゆ
どつくろひ給はらなきうるめさしうるさき
やうまうはうつくしげうくけのそくこなまし
細 そうの御具足ハ吉笑の御物なるへし
露花 それありそへし
とりいそくもうまするはやうこの御ありさまへ
がめくあり繪されておかしきここ海かへ
細 此女源氏の女房たちの衣裳也
女のさうぞくへはふへはいれけうてりしき海
ておもしせられしとここゝかしこにあるへし
師 源より奉る
ハありしなこのこゝろぎへ見きされ
らふゆりきりさきも物わりしけるゆ
りんつきてむかうさはさきゝらりぞおわ
末ハ源氏也

物うりしきさうなしく
けうしあうりんつさて
貞あら紋のけやけさうり
つきてあやしく源のすり
めでゝよ御くりと源の心
をつけまくるとし
あさうう物にさしとられて
細 行幸ありしのとしよろしく
おしくうりりゆへ物ハ筆
の亀 筆の声よりりに 車轅の
うらよけて物のまよ書をとす
きうさとのゆく
さうつく書巾
細 行幸 筒丸さえつゝ書
ハおつのよおそく源氏れも
まれるとりゆく 師 車轅の
奉上りまうりうろとある
ゆへのあつく 明 奥入
菱ろうる一冊
菱そこさせしろくれとを
つまわれあまりてうぞわき
そのつ 傳乃也 不知 叶
細 る別よ引奇 この
紀氏 業平の 小野 そして

きうせまへしまいうさへ物へさしとられて御
孟 車轅の在名人
爲之のあらし海くん おそんゆしきとの露
源の女されハとく 年號しるべしに物ならあまたこと
へいさえんづ書てしうらしてまあすう
あらうさうやくしへゆうあらしゆそうら
らひすひく菱かしゝでえみしてうちまさて
いぞまおどとらりてそひあしる海へうく
ちおりひのそゞめよりきのまつむされて
源の心
よりひやうよこうしてうりょごうし付すゞや
と物語るゝ二条の院よおくしられハ此衆代表
片生之紙の未調 細 就るる古紙ハ紅顔とも
いとおもうれしてきうて物ハきてぐれわらぬはうう
おへつしさてとおありもりとかるにこしのんの
へし 河 ...
さくうの御をおかゝおくあよこそれしるく
若はうる物たまり

もとゆりしうちえへし 傍書
うちえてころとハいひまゐらする
ゐとのへうしこし 河言 れ
てハまうしそるへものひき
やまのまうけものことを
えんしかし
しらつめ 花 山海経云東
海有黒歯國其俗婦人歯
黒染今案日本ハ東海の中
の国也彼俗まあらんかや
昔ハ卯さ女ハたまるすくる
とつけされハ古代のおもて
君のまうりしゝ紫の
姫君も十筆まあるかすそ
しらつめみんしあり
師 古代のおもて君のれうを
つまうそいふりめなき
君とかくて脈まうりて
あらくろめるさとれとう
てそてらくし 竜誤
まものけやうに 歯黒めの
服がうしまもの豊眉ま
まりうくといふし

かまめそしまくてけのしあさ海いうしう
らうしそくひのなとハ君の眉ひたく
しらめもしまうしりもろと知さつる 歯黒めしたまふる也
くせまへれたがものけやうまわりぐら
もいりくしうそうかりらくろかくら 源の観念也
くうらうら代にあれふらんくうるぐら
しきりのともそてゐるらしてと地わりつ
のかうもま知るるあそひし絃弦
まそ多より絃しう川ま地うしらすひ 紫上の君
うつし絃そう袂もうさそへまかをで 末摘の
なつき女とうさしまひてそれまへうまつけ
末摘の歌を絃よ書てまく

師 紫の上のことくうらう
くむらうしきゆとみての
ことをほさめぬるかまく
一説ま末摘のらうしくそり
此何
平仲くらうしにとうりうゑ絃
子 平仲ハ平ノ貞文ヵ弟
ゝ儒者まうれハあざまを
てかとはるあり氏のある
家さゝうそつくくそて平
仲と云之 河 宇治大納言物語
云貞文あうう女のりくにりそ
あくまゐやして硯のかうとふ
ところにおそ用とうんめに
かうと女ありて墨をまりて
ぬらりけうどよくて文ぬし
それハ女はさとみてそ絃う
ね上こそうつしさへ君かみを
まれ人まかくろくうかのけ
しうまま大和物語ま絃
あうとある 哭 河内ち女まハ
硯のまへに出こしてと
よこしく平仲がやうまと
あうそしめてとりまそり

しらわかおりけみさやうさいまらつ
おかいとしふしたすりそまのそくほつら
ひおうるとうさうけんましてこすふかり 源の君よ紅粉とつけて
くしまさらまさくましれらんハこぼう 末摘の赤き鼻のくてまらん
しらへうらむり姫君さくて以うと気え 紫き
らひまゐうかくうつもふ姫なんとうさ 源の詞し
まいんとのまへてくらしてあしめに 細 紫の詞也
てふもやしうひしあやうしそひ絃 源 戯
へりうそのひとしてこしうとまるまね 源の
うりをさまとひわうや酒まいうまの絃 源のお詞し
んまらんとまゝ ...
ゆふとかてりてのさひまへてへりうう 源の詞也

うらへしき仲の仲丸さいに
みそしらむく
あへんとここふれあき梅
孟あへらん、もろうてあるべし
とめらく所似の字アへ卞と擅之
此亀ハへ子の字ま似ての
此し香ハらんとのらく
ましらくニりハ為ここをう花ち
洞ぶかくひどりそえむ孫の
苑をそそ秋もゆうしとおう
てあうもれ花うハ忘むハ
笑く梅やうりく云りく面ろう
とて索笑梅と杜子美も
ほくまうり
らしうし　花　仁和寺河の
行幸の次ろよ八条院よ幸
もく為作寄御輿之便
造階隠云と　見李部王記今天慶六年也
案ニ南階のあまつうしらを
二つそてうへとふききあまもを
えしぐしにら人風笙とひく
ぶしむこてくさ哉てれのる
もこり案御下御あしんよろく　孟入道前の右府云階子唇根のあらく御輿と云ふ

ゲやうよ文どりえへあるあくらんハあへ
（本仲々歌と女の墨うてうでうりされつく）
れんとこうふれあき梅いと稀うし花いとも
おろくかつり日丸いくうらくかうろまめ
柔ある梢のいつう花さる人ともかりくる
しうとかさそそふれる稀どりのふりしな
さ中みも梅え也う花そく馮く為そつまく
まろとうわきそて云ゆくしうへしのあれ
紅梅いしくさく花すそいろつされうち
孫　細説あり　孟梅ハ…紅の鼻…
くれたるのくれそあやにくしうともまらく
梅の立枝ハうれしきれどいでやしあいうく
花を八稀…の詞…
うらうめれまあうらひらくのもう来ていい
の深乃えひ人まきの末いうらへんとく
くろうけ筆